

ジェンダー「平等」を達成するには

ー 『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較よりー

160058 一平 みずき

序章

イギリスはジェンダー平等が進んでいるとされる国の一つである。実際に世界経済フォーラム (World Economic Forum) が発表した The Global Gender Gap Report 2018 によると、ジェンダーギャップ指数に基づくランキングにおいてイギリスは 149 か国中 15 位であり、上位に位置している。この指数は、経済、教育、健康、政治の四分野の分析より割り出され、1 が完全に男女が平等の状態を指す。イギリスの過去 3 年間のデータを見ても 2016 年は 0.752、2017 年は 0.770、2018 年は 0.774 と着実に指数を伸びしており、ジェンダー平等に積極的に取り組んでいる国と言えるだろう。

ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1764-1817) は、ジェンダー平等が進んでいるとされる国イギリスを代表する作家である。彼女が生きた時代から約 200 年経った現代でも、彼女の作品はジェンダー平等の観点で多くの議論が交わされている。英文学者の松本によると、作品には女主人公が直面する結婚問題が提起する社会や経済、倫理の諸問題を契機として、彼女たちが自他をよりよく知り、自己を形成していくというテーマが一貫してあるという (13)。本論文で取り上げる『高慢と偏見』(1813) もまさにこのテーマのもと、物語が展開されている。主人公であるエリザベスが友人や自身の結婚問題を通し、自分の過ちに気づき、成長していくのである。このようなエリザベスの成長、そして結婚から、ジェンダー平等におけるオースティンの考えを読み取ることができるのではないだろうか。

現代では、ヘレン・フィールディング (Helen Fielding, 1958-) の小説『ブリジット・ジョーンズの日記』(1996) のように、オースティンの作品を元にした作品も多く登場している。この作品は雑誌で連載された後、映画化もされ、“very Bridget Jonesy” というような言葉が生み出されるほど社会に大きな反響を呼んだ。『高慢と偏見』から約 200 年後に書かれたこの作品は、まさに現代版の『高慢と偏見』とも言えるが、その 200 年の間にジェンダー問題の状況は大きく変化している。例えば、女性が参政権を獲得したり、性差別を禁止する法が制定されたりなど、確実に進歩していると言えるだろう。そのような実際の社会の変化は、作品にどのような影響を与えているのだろうか。そこで『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』を比較することによって、その変化を捉えることができ、またイギリス社会における問題点も浮かび上がってくるのではないかと考えられる。

そこで本論文は、オースティンの作品の一つである『高慢と偏見』とフィールディングの『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析をすることを主題とする。そしてその共通点や相違点から、ジェンダー平等における課題を明らかにし、解決していくには何をすべきな

のかを探ること、またそれを参考として日本におけるジェンダー問題の改善策を検討することが本論文の目的である。大学の授業を通し文学は単に読んで面白いというだけではなく、様々な文化や社会状況が反映されていることを学んだ。そして『高慢と偏見』を読み、この作品では特にジェンダー問題について色濃く反映されていると感じ、そこにとても興味を持ったためこのような主題、目的のもと研究を行う。

まず第1章では、『高慢と偏見』の作品分析を行う。第1節では、作品が描かれたとされる1800年前後のイギリス社会はどのような状況だったのか、時代背景を明らかにする。第2節では、物語に登場するエリザベス以外の4組の夫婦に焦点を当て、当時の社会がどのように反映されているのか分析を行う。そして第3節でエリザベスとダーシーについて分析し、『高慢と偏見』においてジェンダー平等はどのように描かれているのか考察する。

第2章では、『ブリジット・ジョーンズの日記』の作品分析を行う。分析の方法は第1章と同様、まず第1節で作品が描かれた1990年前後のイギリス社会について明らかにする。そして第2節で主人公ブリジットの友人や母親などの登場人物の分析を行い、社会状況がどう反映されているのかを探る。その後第3節で、ブリジットや相手役となるマークの分析をしたうえで、作品におけるジェンダー平等の描かれ方を考察する。

第3章では、イギリス及び日本におけるジェンダー平等の課題や改善策を考察する。第1節では、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の作品分析を踏まえた上で両作品の比較を行い、両作品の共通点や相違点よりジェンダー平等の課題や進歩した点を探る。第2節では、これからのイギリスにおいて、第1節で明らかとなった課題をどのように解決し、「平等」を達成していくべきか考察する。また、筆者がイギリスにフィールドワークに行った際に、ジェンダー問題に関するインタビュー調査を行ったため、その結果も参考にしながらこれからのイギリスについて論じていく。そして第3節では、日本におけるジェンダー平等について考察を行う。日本は2018年のジェンダーギャップ指数のランキングにおいても110位と対応が遅れていることが明らかである。そこで、「平等」が進んでいくとされるイギリスを参考にしながら、日本でジェンダー平等を達成させるには何をすべきなのかを考察する。

第1章 1800年前後のイギリスと『高慢と偏見』

本章では、『高慢と偏見』を分析し、19世紀イギリスの社会状況や、オースティンのジェンダー平等に対する態度を考察する。序章で示した通り、作品に対しては研究者が様々な議論を行っている。そのため、それらの意見も考慮したうえで、オースティンの考え方を明らかにしていく。まずはじめに作品分析に入る前に、作品が描かれた時代のイギリスについて明らかにする。そして次に、主人公エリザベスや結婚相手となるダーシー、また友人や姉妹などの登場人物を分析し、この作品を通してジェンダー平等がどう描かれているのかを考察する。

第1節 1800年前後の社会状況

「金持ちの独身男性はみんな花嫁募集中にちがいない」（上巻 7）という一文から物語が始まる『高慢と偏見』は1813年に出版された。しかし後に『高慢と偏見』となる『第一印象』が執筆されたのは1796年から1797年にかけてだとされている。現在から約200年前のイギリス社会では、本当に金持ちの独身男性は花嫁を探さなければならなかったのか、また女性はどうのような状況に置かれていたのだろうか。『高慢と偏見』の作品分析をするにあたり、本節では作品が執筆、及び出版された1800年前後のイギリスはどうのような時代だったのか、オースティンが小説で描いている中産階級の生活を中心に明らかにする。

英文学者の鮎沢は、ヴィクトリア女王は完璧な淑女の理想と、家庭の天使という妻のステレオタイプをイギリス国民に与えたが、その少し前となるオースティンの時代はそのような価値観に縛られない自由さが残されていたと指摘している(111)。ここで鮎沢が言う「自由」とは、「社会において、古い価値観と新しい価値観とが対立したまま、その両者がそれぞれに矛盾対立する状態の中で、自己主張を許された自由」(111)であると説明されている。ジェンダー平等の観点で見ると、確かにオースティンとほとんど同じ時代にメアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft, 1759-1797)という現在のフェミニストの先駆者と言えるような女性が存在し、まさにウルストンクラフトは新しい価値観を持って自己主張をしていた人物の一人だと言えるだろう。

彼女の有名な作品には『女性の権利と擁護』(1792)がある。この作品は、「男性が女性の劣等性を強めてきたので、ついに女性は、理性的存在とは言えない程に墜落してしまった」(70)というように男性によってつくられている女性観や、また「女子教育の無視こそが、この嘆かわしい悲惨さの大きな根源だという深い確信」(23)と当時の女性教育の批判を中心として、女性の権利について主張をしている。英文学者の安達は、このようなウルストンクラフトの女性に対する考え方は現代フェミニズム思想の豊かな水源であり、現在においても生き続けていると指摘している(175)。現在の思想にもつながる考え方が200年も前の時代に主張されていたことは、オースティンを含めた当時の人々に対しても何かしらの影響を与えたと容易に想像することができる。女性が置かれていた立場を分析し、自分の意見を主張したウルストンクラフトは、まさに当時の社会に縛られない自由さを持った人物

であり、ウルストンクラフトの「親愛なるわが世代の友よ、このような狭い偏見を乗り越えよう！」(175)という言葉は、当時、現代、そして未来を生きる多くの女性たちに残り続けていくことになるだろう。

しかし、鮎沢はある種の自由が存在していたことを認めていると同時に、新旧の対立する価値観のうち古い価値観は強力に残存していたとも指摘する(112)。その古い価値観、すなわち女性は劣っているものとする考えにより、当時の女性は、社会的、そして精神的にも自由に生活を送ることはできなかった。女性学研究者のハルによると、1500年ごろから社会の基礎には女性は生まれつき劣勢で、才能に限界があるため、女性は家庭にいるべきで人前では絶対に話すべきではないという考えが存在しており、それはキリスト教による影響が大きいと指摘している(7)。聖書の中には、女性は男性の役に立つふさわしい助け手として男性からつくられたと記述があり、これにより、女性は男性より劣っているという考えが人々に植え付けられてしまったのである。これは男性にだけでなく、女性自身にも「服従と隷属意識」(30)の意識を自然と持たせることになり、300年経った1800年になっても、古い価値観としてその意識が残っていたのである。しかし人前で絶対に話すべきではないというような極端なものは1800年においてはなくなると言えるかもしれないが、鮎沢の指摘通り、古い価値観は人々の中に強力に存在し、次第に女性が劣勢という考えは社会の基礎となり残り続けていたのである。

1800年前後では、この古い価値観が制度として目に見えていた。継嗣相続もその一つである。この継嗣相続とは、財産の相続を一家の長男に限定するものであり、もし男子がいなければ、一番近い血筋の男子が相続人となる。そのため、『高慢と偏見』に登場するベネット家の娘たちは財産を相続することができず、大きな問題とされていた。また、本節の冒頭で提示した本当に金持ちの独身男性は花嫁を探さなければならなかったのかという問いの答えも、この制度を見れば明らかである。つまり、男性は一家の衰退を防ぐため、財産を守り受け継ぐために花嫁、そして自分の息子が必要だったのである。一方、女性においても、この制度によって生きていく上での選択肢が大きく制限されていた。当時、中産階級の女性ができる仕事として家庭教師があったが、仕事をする事自体は女性にとってあまりいいこととされなかった。そのため、生活をしていくには結婚をしなければならない状況に置かれていた。この男女それぞれの理由により、当時の結婚は愛のない形式的なものが多かったのである。

これに関連し、女性の教育は現在とは大きく異なるものであった。英文学者の青木は娘を上流階級に嫁がせるという極めて現実的な目的より、フランス語や音楽、美しい立ち振る舞いなどの「たしなみ」の教育が中産階級において行われていたと指摘する(149)。女性やその家族は、なるべくいい結婚相手を得ようとすればするほど、このような「たしなみ」の教育に力を入れることが容易に想像できる。しかし「たしなみ」の教育で得るものは、男性を楽しませるためのものであり、女性は教育を受ければ受けるほど、自分の役割や行動を制限してしまっていたのである。

本節では、『高慢と偏見』が描かれたとされる 1800 年前後のイギリス社会について、中産階級の生活を中心に明らかにした。当時の社会には、現代にも通じるようなフェミニズムの思想もあった一方で、女性は男性よりも劣っているという古い考え方がまだ広く浸透しており、教育をはじめとして女性は自由に生活できなかつたことが明らかとなった。そしてこの考えは継嗣相続という目に見える形でも表れていたが、これは女性だけではなく男性にも結婚における制約を与えていたことがわかった。

第 2 節 4 組の夫婦

本節では、主人公エリザベスとダーシー以外の 4 組の夫婦、ベネット氏とベネット夫人、コリンズとシャーロット、ウィッカムとリディア、そしてビングリーとジェインの結婚について分析をする。英文学者の大島は、歴史的な大事件はオースティンの作品の表面にはほとんど出てこないが、作品世界のマナーズ、つまり慣習や振る舞い、ものの考え方においては時代にたいへん忠実であったと指摘している (270)。確かに作品の中には歴史的な事件は一切触れられておらず、中産階級の生活そのものを描いている。そこで 4 組の夫婦にはジェンダー平等の視点より、どのようなマナーズが反映されているのかを考察する。

まずはエリザベスの両親である、ベネット氏とベネット夫人である。「もしエリザベスの結婚観が、自分の両親を見てできあがったとしたら、結婚生活の幸福や家庭の楽しさについて、あまり明るいイメージは生まれえないのが当然だろう」(下巻 58) と語られているが、この 2 人は一時の情熱で結婚し、結婚後はすぐに熱が冷めてしまった。ベネット氏は頭がいいのにもかかわらず、その能力を無駄にし、ばかばかしいことを皮肉に笑うことを楽しみとしている。また、ベネット夫人は娘をお金持ちと結婚させることを常に考えており、何か自分が気に入らないことが起こるとすぐにヒステリーを起こす。

比較文学者の Brown は、ベネット夫人は「しきたり通りに教育された女性」(337) であると指摘している。このしきたり通りというのは、妻になるための教育のことである。確かにベネット夫人は頭がいいとは言えないが、家庭や娘の面倒を見ようとしている。特に「ベネット夫人にとって、人生の目的は五人の娘を結婚させること」(上巻 11) と語られている通り、妻として常に娘の将来について考えている。一方でベネット氏は「夫としての義務と礼儀にそむいて、子供たちの前で妻を笑いものにする」(下巻 59) と夫や父としての役割をあまり果たしているようには見えず、英文学者の坂田は彼が「父親として失格であることだけではなく、父親として無能」(53) であると述べている。しかし、「この問題に関しては、私の意見を自由に言わせてもらいたい」(上巻 196) と時には自分の意見を主張したり、また近所に引っ越してきたビングリー氏にすぐに挨拶に行っていたりなど、最低限の夫、父親としての役割は果たしているように思われ、失格とは言えないだろう。

以上のような夫婦関係からなるベネット家について、英文学者の鮎沢は、ある程度の家柄と財産を持ち母親が娘の結婚を願う「父権なき核家族、ある意味では現代の家庭のあり様を先取りした家庭生活」(146) を繰り広げているのだと指摘している。家庭内で父親が権威を

振りかざさずに、妻も「あなた！自分の娘たちによくそんなひどいことが言えますね！」（上巻 10）というように、夫に対し引け目を感じずに物事をはっきりと言っている様子は、この家庭自体はどちらかという、家父長制が強く残っていた当時の家庭よりも、その制度が緩くなっている現代の家庭に近いと考えることもできるだろう。

次にエリザベスの従兄のコリンズと友人のシャーロットである。コリンズは「高慢と追従と、尊大と卑下が混ざりあった奇妙奇天烈な人間」（上巻 122-123）であり、牧師をしている。ベネット氏には娘しかいないため、継嗣相続により家と土地を相続することができず、コリンズが財産相続人となっている。そして彼はそのことの補償をするためにベネット家の娘の一人を妻にしようと考えていた。そして彼はエリザベスを妻にしようと考え、プロポーズをする。しかし断られてしまったため、次にエリザベスの友人で親切に接してくれていたシャーロットにプロポーズをする。前述の通り、コリンズは頭のいい男性ではなかったが、シャーロットはそのプロポーズをすぐに受け入れた。なぜなら「財産のない若い女性にとって、結婚は、人並みに生きるための唯一の生活手段であり、かりに幸福になれないとしても、飢えだけは免れるからだ」（上巻 215）と語られている通り、彼女は 27 歳だったためオールドミスになる恐れを抱えており、安定した生活をなるべく早く得たかったからである。

まさにシャーロットの結婚の決め手は当時の女性をよく表しているのではないだろうか。前節で示した通り、中産階級の女性が働くことはタブーとされていた当時は、結婚することが生きていく手段であった。そのため、結婚するチャンスをつかむことができなければ安定した将来は保証されない。このような状況に置かれ、危機を感じた彼女は結婚を決めたのだが、自分の結婚に対し彼女は「意外に冷静」（上巻 214）であった。この言葉より、結婚はロマンティックなものとはあまり言い難いことが読み取れる。一方で、コリンズが結婚に急いだ理由も明らかである。前節でも分析した物語冒頭の一文「金持ちの独身男性はみんな花嫁募集中にちがいない」（上巻 7）にコリンズは当てはまっている。「立派な家と十分な収入を得ると、つぎは結婚」（上巻 123）とあるように、当時の財産を持つ独身男性として当たり前前の行動をしたのである。以上のように分析した結果、シャーロットとコリンズの結婚はまさに当時の社会のマナーズを忠実に表しているような結婚であると言える。

ウィッカムとリディアは駆け落ちの末に結婚した夫婦である。この 2 人の結婚の特徴はお金のないことである。物語の中で「お金のない者同士が好きになっても不幸になるだけ」（上巻 250）と言われているが、この言葉が本当ならばウィッカムとリディアは幸せにはなれないだろう。実際に、2 人の結婚後については「リディアにたいするウィッカムの愛情はすぐに冷め、彼にたいするリディアの愛情も、それよりすこし長くつづいただけ」（下巻 303）と語られているほか、お金がなく生活に困り、たびたびエリザベスとダーシーにお金を頼む様子が描かれている。このような様子からは、あまり幸せな結婚生活を思い浮かべることはできないため、お金のない者同士の結婚は不幸になるというのは事実ということになる。

しかし、リディアとウィッカムの結婚の役割は、当時の社会におけるお金の無い者同士の結婚の苦難を示すことだけではないだろう。リディアとウィッカムの駆け落ちは結果とし

て未遂に終わったものの、その行為自体は家族や親戚、そしてその周囲の人々に大きな衝撃を与えるものであった。しかし 2 人の行動の中でも特にリディアの行動は、人にどう思われるかは気にせず、自分の意思を貫く自由さを感じさせる。当事者だけでは結婚を決めることができなかつた時代、女性には選択肢がほとんどなかつた当時の社会状況を考慮すると、駆け落ちはそれらに反抗するような行為である。これを実行できたのは、エリザベスが問題視しているリディアの「無神経で、粗野で、騒々しくて、怖いもの知らず」(下巻 183) な性格が関係しているだろうが、この性格だったからこそ社会に反抗するような行動を起こせたのであり、これは女性の生活が制限されていたことに対する一つの諷刺であると解釈することができる。

最後にビングリーとジェインである。2 人は物語冒頭から恋に落ちていたが、ビングリー姉妹やダーシーからの邪魔が入り、なかなか結婚までには至れなかつた。しかし最後には 2 人は結ばれ、エリザベスとダーシー同様、恋愛結婚を果たしたのである。恋愛結婚という点では、当時の社会では珍しいことであり、お互いの将来のためだけにする結婚と比較すると、この結婚は女性が自分の気持ちを尊重したフェミニズムの要素を含んでいるものと考えられる。このフェミニズムという言葉は、広辞苑第七版の「女性の社会的・政治的・法律的・性的な自己決定権を主張し、性差別からの解放と両性の平等とを目指す思想・運動」(2529) のことを指す。しかし Brown は、ジェインは女性であることの征圧的なイメージの囚人であると指摘している (336)。自分の意見をはっきりと言うエリザベスとは違い、ジェインは美人で控えめ、従順であり、エリザベスが彼女のことを「お姉さまは、誰でも好きになってしまう性格なの。ぜったいに他人の欠点を見ないの」(上巻 27) というように、どんな人物でも悪い人はいないと信じているため、常に愛情をもって人と接する。このような性格をしている彼女は、男性を家庭でサポートする伝統的な「女性」のイメージと一致していることも納得できる。

この「女性らしい」性格が結婚生活にどのような影響を与えているのかは、物語には描かれていない。しかし、ジェインはビングリーとの仲を彼の姉妹に邪魔をされるといふようなひどいことをされても「私は彼女に同情します。ひどいことをしたと後悔しているでしょうし、これはみんなお兄さまのことを思ってしまったことだと思います」(上巻 257) と優しさをみせていることから、結婚後も彼女の性格は変わらないと予想できる。このように考えると、ジェインは「女性らしさ」から、まさに囚人のように逃れることはできずに、夫であるビングリーの良き妻として、自分の意思を出さずに生活していこう。このようにビングリーとジェインの結婚は、一見幸せで愛のあふれる恋愛結婚に思われるが、そこには伝統的な「女性らしさ」から逃れられない女性の姿が隠されているのである。

以上のように、ベネット氏とベネット夫人、コリンズとシャーロット、ウィッカムとリディア、そしてビングリーとジェインの 4 組の結婚には妻や女性の振る舞いなどのマナーズだけではなく、リディアを通し諷刺がされていることが明らかとなった。また 4 組の中でも特に、コリンズとシャーロットの結婚からは男性は財産を守り受け継いでいくため、そし

て女性は生活のために結婚をしなければならないという中産階級の男女が置かれていた状況を読み取ることができた。これらの 4 組の結婚はエリザベスにも大きな影響を与えていると考えられる。

第 3 節 エリザベスとダーシーの結婚観

本節では『高慢と偏見』においてジェンダー平等がどのように描かれているのかについて論じる。前節で、エリザベスとダーシー以外の 4 組の夫婦について考察し、当時の中産階級の状況がそれぞれの結婚に反映されていることが明らかとなった。本節ではそれらの結婚、特にエリザベスが一番大きな反応を示していたコリンズとシャーロットの結婚を中心として、エリザベスにどのような影響を与えているのか、そしてそれによりどのような彼女の結婚観がつけられたのかを明らかにする。また、ダーシーについても、物語を通しどのように成長しているのかを明らかにする。そして本節の最後には、それまでの分析を踏まえ『高慢と偏見』という物語を通し、ジェンダー平等がどのように描かれているのかを判断する。

前節で考察した 4 組の結婚の中でも、特にシャーロットの結婚に対して、エリザベスは反対の意を示している。

シャーロットが自分の気持ちをすべて犠牲にして現実的利益だけを考えて結婚するとは、エリザベスは思ってもいなかった。シャーロット・コリンズ婦人！ああ、なんという屈辱的な光景だろう！親友が自分で自分はずかしめる姿を見るのは悲しいし、親友に失望せざるをえないのも悲しいが、さらに悲しいのは、シャーロットが選んだこの結婚が、彼女を幸せにするととても思えないということだ（上巻 219-220）

コリンズとシャーロットが結婚するとわかると、エリザベスは上記のような発言をしており、当時の女性にとっての結婚の目的、生活のため、つまりお金のための経済的な結婚に強く反対する姿勢が見て取れる。この言葉より、彼女は当時のイギリスではあまり一般的でなかった恋愛結婚を支持しているのではないかと推測することができる。しかしその後、シャーロットが結婚生活をうまく送っているとわかり、「現実的なことだけを考えれば、彼女にはいい結婚だったんだと思います。」（上巻 306）とシャーロットの結婚を認めている。そのため、結果的には生活のための結婚を否定していないことがわかる。それではエリザベスの結婚観はどのようなものなのか、また物語の中でその結婚観は変化しているのだろうか。

エリザベスが恋愛結婚を支持している様子を、二回プロポーズを断っていることから読み取ることができる。結婚しなければ生活ができない女性の状況から、女性がプロポーズを断ることはかなり難しいことだっただろう。一回目のプロポーズはコリンズからのものであるが、英文学者の向井が、ベネット夫人から見れば娘の結婚相手としてコリンズ氏の資格

は十分なものと指摘しているように (65)、牧師という安定した職業であり、またベネット家の財産を将来相続することになるコリンズとの結婚は、家族または本人にとっても悪い話ではない。しかしエリザベスは「私の気持ちが、ぜったいにいやだと言っているのです」(上巻 190) と、はっきりと断った。ただこれはコリンズとシャーロットが結婚をする前の話であるため、もともと彼女はお金や家のつながりだけで結婚はしないという結婚観を持っていたということになる。しかし後に彼らの結婚を認めているところを考えると、その後エリザベスの結婚観が変わっている可能性も否定できない。

そこで二回目に断ったプロポーズについて分析をする。二回目のプロポーズはダーシーからである。英文学者の谷田が「登場人物の収入はその人物の評価を決定する最重要事項の一つ」(99) と指摘しているが、「部屋に現れて五分もしないうちに、彼は年収一万ポンドの大富豪という噂がひろまった」(上巻 19) というように、ダーシーはかなりのお金持ちであるため、それだけで彼の社会的な評価は高いだろう。エリザベスはそんな彼からのプロポーズでさえ、「私はあなたのプロポーズをお受けする気はまったくありません」(上巻 331) と断ったのである。コリンズとシャーロットの結婚を経ても、エリザベスの結婚観は変わらずに、将来の裕福な暮らしのために結婚することはせず、自分の気持ちを大切にしていたことが明らかである。これは、女性が働くことがほとんどできなかった 18 世紀、19 世紀を生きたジェイン・オースティンが、恋愛結婚が簡単にできるような女性の自由さを求めていたということなのではないだろうか。しかしエリザベスが生活のための結婚を完全には否定していないことから、生活の手段としての結婚も当時の社会では必要であったという事実をオースティンは無視できなかったということであり、そこからいかに当時の女性の生活が制限されていたのかという厳しい現実を読み取ることができる。

ダーシーからのプロポーズを一回は断ったエリザベスだが、彼からの二回目のプロポーズでは結婚を決めている。なぜ一回目ははっきりと結婚を断っていたのに、二回目は承諾したのだろうか。この一回目と二回目のプロポーズには、エリザベスとダーシーの両者の変化、成長を読み取ることができる。まずはエリザベスだが、一回目のプロポーズの時には彼女は自分の人を見る目を信じ込んでいた。しかしその後、ダーシーから真実が書かれた手紙を受け取り、「いままで、ダーシーについてもウィッカムについてもまったく盲目で、不公平で、偏見のかたまりで、お話にならないほど何もわかっていなかったのだ」(下巻 14) と、自分の偏見に気づくことができた。彼女は彼に出会ってからすぐにほかの人と同じように彼を高慢と決めつけ、その後もずっと彼を嫌な人と決めつけていた。しかしその間違いに気づけたことで、彼への見方を変えることができたのである。一方でダーシーは一回目のプロポーズの時には、「自分はあなたを愛しているが、身分も家柄も違うので、あきらめるべきではないかと悩み苦しんだ」(上巻 324) と身分の違いを気にしており、自分より下の身分の人間を無意識に見下していた。しかし、その失礼な態度をエリザベスに指摘され「あなたはばくの高慢の鼻をへし折ってくれたのです」(下巻 273) と、自分の高慢さに気づき、態度を改めることができた。

「彼にたいする愛情は一日にして成ったわけではなく、何ヵ月もの紆余曲折を経て生まれたのだ」（下巻 286）と語られている通り、二人は過ちを経験したことで成長でき、その結果、愛情のうえで結ばれたのである。エリザベスが経済的な結婚ではなく、恋愛結婚にこだわった理由は、男女が対等な関係を築くことができるからではないだろうか。経済的な結婚だとお金を稼ぐことができない女性と、お金を稼ぎ、家族を養う男性の間には自然と格差が生まれてしまい、それを埋めることは難しいだろう。しかし恋愛結婚だと、経済面でみると経済的な結婚と同様、男女間に格差が生まれてしまうが、それ以外の部分、つまり精神的な部分では対等な関係を築くことができると考えられる。エリザベスとダーシーの結婚後の様子を読むと、「陽気なふざけたような口のきき方」（下巻 304）や、「エリザベスの説得によって、ダーシーは叔母の無礼を水に流して和解を申し出た」（下巻 305）など、エリザベスは夫であるダーシーに気後れすることなく接し、ダーシーもその態度を気にしていない。そのため、エリザベスとダーシーの間に精神的な格差はほとんどないと考えられる。

このように恋愛結婚によって格差を埋めることができるとすれば、ビングリーとジェインの結婚もこれに当てはまることになる。しかし前節で、ジェインは結婚後も女性であることから逃れられないと論じたように、彼女は結婚後もビングリーのすべてを受け入れ、助けになる良き妻として生きていこう。このジェインの家庭でのあり方は男性と対等な関係であるとは言い難い。ウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』の中で「女性が尊敬されるようになるためには、知性を働かすことが必要である」（100）と指摘している。エリザベスはダーシーに対して偏見を持っていて大きな間違いを犯してしまったものの、それ以外の部分ではベネット氏が「みんなばかで無学で、そのへんの娘とちっとも変わらん。だがリジーはちがう。頭の回転がちがう」（上巻 10）と言うように、ほかの女性とは違い知性を持つ女性として語られている。そのため、エリザベスの結婚後のダーシーとの対等な関係は、恋愛結婚だけではなく、知性もあつたからではないかと考えられる。ここが同じ恋愛結婚をしたジェインとエリザベスの結婚生活の大きな違いである。

これまでエリザベスとダーシーの恋愛結婚について分析してきたが、エリザベスは恋愛結婚ではなく、戦略的にダーシーと結婚したのではないかという意見もある。英文学者の廣野は「私は成上り」というのが、彼女の〈スキーマ〉」（138）であるとした上で、彼女の生意気な態度は「結果的にはダーシーを惹きつけるための「戦略」として、成功した」（186）と指摘している。しかし成り上がることが彼女の一番の目的であるならば、ダーシーからの一回目のプロポーズを受け入れたのではないだろうか。廣野によると、ダーシーは生まれながらにして身分や財産、知識を持った「本物の存在」（172）であるため、これ以上彼女が成り上がるための最適な相手はいないだろう。しかし彼女は「骨の髄まであなたが大嫌いになったのです」（上巻.331）と、強い言葉で断っている。もし成上るために彼と結婚したいとエリザベスが考えていたならば、一回目のプロポーズを断る理由はないだろう。また、断るときの言葉からは、嫌われてもかまわない強い意志が感じられる。そのため、彼女に戦略的意図はなかったのではないかと考えられる。

以上の分析より、エリザベスとダーシーの結婚は愛情のもと結ばれたものであり、対等な関係を築けていることが明らかとなった。これはオースティンが彼らの結婚を通して、ジェンダー平等を描いたと言えるだろう。しかし彼らは精神的な部分では対等な関係にあるが、やはり経済的な部分の格差は残っており、結婚後エリザベスはダーシーに頼って生活していくことになる。そのため経済的な点でみると、結局はエリザベスもほかの女性と同じであり、これはジェンダー不平等の部分である。そのため、『高慢と偏見』の作品分析としては、エリザベスの結婚までの過程は十分ジェンダー平等を意識したものだが、その結果は平等と不平等の両方が混在しており、オースティンが前端的にジェンダー平等を描いたわけではない。しかしジェンダー平等を当時の慣習と織り交ぜながら物語に入れることによって、社会に大きく反対されることもなく、多くの人々にオースティンのジェンダー平等を望む声を届けることができたと考えられるだろう。

本節では、エリザベスとダーシーの分析を通し、『高慢と偏見』ではジェンダー平等がどのように描かれているのかを考察した。コリンズとシャーロットの結婚やプロポーズの拒否を通し、エリザベスは恋愛結婚が望ましいと考えていることが明らかとなった。また、ダーシーもプロポーズを通し自分の過ちに気づいたことで、エリザベスに対する高慢な態度を改めることができた。それにより彼らは精神的に対等な関係を築いており、これはオースティンがジェンダー平等を描いていると言える。しかし結局は経済的にはエリザベスはダーシーに頼って生活していくことになるため、『高慢と偏見』ではジェンダー平等と不平等の両方が描かれていることがわかった。

本章では、『高慢と偏見』の作品分析を行い、オースティンのジェンダー平等に対する態度や、作品を通しジェンダー平等がどのように描かれているのかを考察した。第1節では、作品が描かれた時代背景として、女性の生活における選択肢が限られており、自由に生きられないことが明らかとなった。そして第2節では、エリザベスの周囲にいる4組の夫婦に、そのような時代背景の反映やそれに対する諷刺がされていることが分かった。そして第3節では、エリザベスとダーシーの分析より、恋愛結婚をしたことで精神的に対等な関係を築けていることが明らかとなった。以上より、オースティンはジェンダー平等を望んでおり、また『高慢と偏見』において、ジェンダー平等は当時の慣習とうまく織り交ぜられながら描かれているといえる。

第2章 1990年前後のイギリスと『ブリジット・ジョーンズの日記』

前章では、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』には中産階級における様々な社会の状況が反映されていること、そして結果的には不平等な部分があったものの、エリザベスとダーシーの結婚を通してジェンダー平等が描かれているということが明らかとなった。本章では、そのような『高慢と偏見』をもとにして描かれた『ブリジット・ジョーンズの日記』の作品分析を行う。この作品は、独身で30代前半、中産階級のブリジット・ジョーンズが仕事や恋愛に奮闘する物語である。本章では、このブリジットの奮闘を通して、ジェンダー平等がどう描かれているのかを考察する。方法は前章と同様、まずはじめに作品が描かれた1990年前後のイギリス社会のジェンダー観について明らかにする。そして次にブリジットや相手役のマーク、そして友人や母親などの登場人物をジェンダー平等の観点から分析する。

第1節 1990年前後の社会状況

『ブリジット・ジョーンズの日記』は1995年から雑誌で連載され、翌1996年には小説に、そして2001年には映画化もされたとても人気の作品である。またその後も『ブリジット・ジョーンズの日記 きれそうなわたしの12か月』(1999)と続編が制作され、大きな話題となっていた。本節では、『高慢と偏見』がもとになっている一作目の『ブリジット・ジョーンズの日記』が描かれた1990年前後のイギリスについて、当時のジェンダー平等を押し量るためにその社会背景を明らかにする。

まずは、『高慢と偏見』が描かれたとされる1800年前後のイギリス社会から1990年に至るまで、ジェンダー平等においてどのような変化が起こったのかを整理する。一番の大きな変化は、女性が参政権を獲得したことだろう。イギリスで初めて女性が参政権を獲得したのは1918年であり、その10年後の1928年にはすべての女性が参政権を獲得した。この変化をもたらしたのは、サフラジェットと呼ばれる婦人参政権論者の女性たちであり、彼女らは時には過激な方法も使用しながら社会に女性の権利を求め続けた。そして第一次世界大戦で女性が男性の代わりとなって家庭の外に出て働いたことがきっかけにもなり、目標であった参政権を獲得することができた。この参政権獲得に向けた一連の動きを含む、男女平等を求める運動は第一波フェミニズムと呼ばれている。

次に訪れる1960年から1970年にかけての動きは第二波フェミニズムと呼ばれている。この前には第二次世界大戦があり、女性は第一次世界大戦と同様、男性の代わりに働いた。そしてテレビプロデューサーのホールズワースが、戦時中に既婚女性を労働力として必要としたことが結婚という障害をなくし、それを元に戻すのが難しいほど大きな変化が起こったと指摘しているが(128)、第一次世界大戦と同様、戦争がジェンダー平等において大きな影響をもたらしたのである。第二次世界大戦後には女性が働くことは一般的になってきたが、その後はホールズワースが「夫におだてられてきた家庭の天使は、スーパーウーマンに変身した」(47)と述べている通り、女性は育児や家事も手を抜かずに、働かなければな

らなかった。第一波の時と比べ、多くの女性が働けるようになったという点では大きな前進であったが、男女共働きにもかかわらず、家事は女性の仕事であるという考え方は残り続けていた。このような状況は不平等の例の一つであるが、家父長制や女性の自立を含む家庭や職場など社会のあらゆる場所に残されている不平等をなくしていくために、女性は再び男性と平等な権利を主張するようになった。そしてそれが第一波に続く第二波フェミニズムと呼ばれる大きな動きになったのである。

また、この第二波フェミニズムの時には、マスメディアが伝えるメッセージだけではなく、マスメディアの組織のあり方も批判されていたと社会学者の国広は指摘する。国広によればその理由はメディアの発達により人々は容易に情報を得られるようになったが、その情報が男性目線の固定的な女性イメージを流布し、女性に対する抑圧を助長していたからであるという(2)。このような第一波の時には見られなかった新たな問題が、時代の変化により第二波では明らかになっていった。

以上のように『高慢と偏見』が描かれた1800年から『ブリジット・ジョーンズの日記』が描かれた1990年までの間に女性は声を上げ続けた結果、多くの権利を獲得し、着実に平等への道を進んでいたのである。ではそのような変化を経た1990年はどのような社会だったのだろうか。カルチュラルスタディーズを専門とするMcRobbieは「1990年はターニングポイント」(256)だと指摘している。その理由の一つはポピュラーカルチャー、特に雑誌を通して女性についての発信がされるようになったからである。第二波フェミニズムの時点では、雑誌を含むマスメディアは固定的な女性のイメージを社会に発信するものとしてフェミニストからの批判もあったが、1990年になるとそれが変化し、ドメスティックバイオレンスや賃金の平等などの女性が抱える問題が発信されるようになったのである。『ブリジット・ジョーンズの日記』が雑誌連載で注目を集めたということも、このターニングポイントを迎えていたからであり、作品が多くの女性に関心を持つことを描いていたからと考えることができるだろう。

また1990年頃になると「ポストフェミニズム」や「第三波フェミニズム」と呼ばれる時代に突入する。まずポストフェミニズムであるが、この言葉には二つの意味で使用されることがあり、一つは英文学者の河野が述べている、ポストフェミニズムはフェミニズムの一形態ではなく、フェミニズム以後の状況というものであり、彼はこの状況をうまく表現しているのが『ブリジット・ジョーンズの日記』であると指摘している(151-152)。これは、ポストフェミニズムという言葉通りの意味であり、フェミニズム以後の状態のことを指している。もう一つの意味としては、アメリカ文学者の三浦が述べているように、ポストフェミニズムとは、「フェミニズムは終わった」(62)という認識である。この考えの特徴は、性差別的な制度はなくなったことによりフェミニズムはもはや無意味なため、自分は個人力で生きていけるし成功もできる、そしてもしその過程で何か問題が起きてもそれは性差別の問題ではないというものだと指摘している(62)。男女平等はまだ達成されたとはいえないにも関わらず、このような認識が広まってしまうことで、個人主義が進み女性にかかわる

問題が個人の問題に置き換えられ、ジェンダー平等の問題が不可視になってしまうことが考えられる。

一方で「第三波フェミニズム」という言葉について、河野はポストフェミニズムに対処するのが第三波フェミニズムであり、ポストフェミニズムにみられる個人主義や文化政治がアジェンダとされていると述べている(152-153)。また、メディア文化論を研究する田中は、第二波フェミニズムに共感しつつも、抱かざるをえないかすかな違和感やためらいを若い女性たちは表明するようになり、そのような動きが第三波フェミニズムと呼ばれるようになったと指摘している(5)。河野や田中のように第三波フェミニズムについて述べている学者はいるものの、第三波フェミニズムの定義はあまり明確にはされていない。しかし、第三波フェミニズムは、第二波フェミニズムやポストフェミニズムに対しての批判をもとに起こっているものなのではないかと考えられる。

以上のように1990年頃のイギリスでは、1800年前後よりジェンダー平等が大きく進歩していることがわかった。そして第二波フェミニズムに引き続き、ジェンダー平等に関心を持つ人々がいた一方で、ポストフェミニズムというような反フェミニズム的な感情が人々の間、特に若い女性の間で広まっていたということが明らかとなった。そのため、この時代はジェンダー平等を望む人、フェミニズムを古いと考えている人、またそれにより不平等に気づいていない人などが混在している複雑な時代であったと言える。

第2節 脇役における社会の反映

前節では、『ブリジット・ジョーンズの日記』が描かれた1990年前後のイギリス社会におけるジェンダー平等の状況を明らかにした。本節では、そのような社会状況が作品にどのように反映されているのか考察を行う。方法としては、主人公ブリジットとその相手役となるマーク・ダーシー以外の登場人物、ブリジットの母親、友人であるシャロン、トム、マグダ、そして独善的既婚者と呼ばれる人々について分析を行う。

まずはパム・ジョーンズについてである。彼女はブリジットの母親であり、35年間という長い間、専業主婦として生きてきた。しかし、夫が退職したことをきっかけにその生き方を大きく変化させる。彼女は「家事労働に見合う報酬をもらいたい、わたしはあなたたちの奴隷として人生を浪費してきた」(70)と、これまで専業主婦として家庭に縛られてきた生活や、この労働は一生続くという不平等さを語る。そしてその後「キャリアが欲しい」(103)と、働くことを決意する。彼女はその言葉通り職を手に入れ、生き生きと働きはじめる。なぜパム・ジョーンズはこのように生活を大きく変化させたのだろうか。この背景には、第二波フェミニズムがあると考えられる。前節で論じた通り、第二波フェミニズムは1960年から1970年頃にかけて起こった、女性が平等を求めて行った一連の活動である。彼女はこのような動きがあった間、妻、そして小さな子供を抱える母親として生活していたため、フェミニズムの考え方に興味を持っていたとしても、なかなか実際の行動には移せなかったのではないかと推測できる。しかし子育てが終わり、夫も退職をしたことが今までの人生を振

り返るきっかけとなり、家族に尽くしてきた人生、すなわち自由に生きられない女性の不平等さに疑問を覚えたのだろう。そして「残された人生は自分のために使おうと決めた」(80)のである。

また彼女は男性についても「わたしたちの世代の女は生まれてからずっと教えられてきたわ、夢中にさせてくれる人が現れるのを待つんじゃないで、『多くを期待せず、多くを許せ』って」(284)と語っている。この言葉より、女性が男性に対してどのように教育されてきたのか、そして女性と男性の格差を読み取ることができる。第二波フェミニズムは社会に残る不平等をなくすための活動だったが、彼女が経験したこの不平等も女性たちがフェミニズムの活動をする理由の一つだろう。このようにブリジットの母親パム・ジョーンズは、第二波フェミニズムの影響を受けている人物、また第二波フェミニストと同じように男女の不平等を経験してきた人物であると考えられる。

次にブリジットの友人シャロンである。彼女は頑強なフェミニストであり、常にブリジットら友人にフェミニズムの理論を語っている。彼女は社会において「男はすべてを手に入れられる文化」(185)があると主張しており、この言葉よりまだ残されているジェンダーの不平等を読み取ることができる。そして「今日この時代、女が必要とするのは自分自身だけだ」(413)と、女性は男性に頼らなくても生きていける時代であることを示している。前節で論じた通り、第三波フェミニズムの定義は明確になっていない。しかし、常に男性優位の社会について語っている彼女は第三波フェミニズムの動きを生み出している、またはこれから生み出していく一員であると言えるのではないだろうか。

トムもブリジットの友人の一人である。彼はホモセクシュアルであり、「ホモセクシュアルと30代の未婚女性とは自然の絆で結ばれている」という考えを持っている。なぜこの絆が生まれるのかというと、「常習的に親を落胆させていると同時に、社会から変人として扱われている」(41)からだという。この物語の中で、トムを通してホモセクシュアルの困難が描かれていることは、ジェンダー平等の観点において重要な点だろう。ここまで本論文では、ジェンダー平等でも特に男女の平等について論じてきた。しかしLGBTQと呼ばれるような性的マイノリティも、ジェンダー平等を論じるにおいて欠かせない点である。性教育研究者の小宮は、イギリスでは同性愛は比較的目に見えるものとして存在してきたと指摘している(34)。歴史的に見ると、1533年から1861年まで同性愛は法で禁じられており、死刑になることもあった。法が改正された後には同性愛解放運動が多く行われていたが、エイズの影響などもあり差別は根強く残り続けていた。トムの言葉によって、1990年になっても差別が残り続けていることが明らかで、実際にパム・ジョーンズが「ゲイなんて、怠惰以外のなにものでもない」(53)と差別的な発言をしている。このようにトムを通し同性愛者の困難を物語中に描くことで、ジェンダー平等における課題は男女だけではないことを描いているのではないだろうか。そして、トムの発言より、30代の未婚女性も、同性愛者と同じように社会から差別的な目を向けられていたことを読み取ることができるが、これは後述する独善的既婚者と呼ばれる人々から向けられていると考えられる。

作品分析から 1990 年前後の時代には、ホモセクシュアルと 30 代の未婚女性に差別的な目が向けられていることが明らかとなったが、既婚女性は社会においてどのような状況に置かれていたのだろうか。シャロンもトムも独身の友人であったが、マグダは既婚者の友人である。彼女はもともと仕事をしてきたが、現在は 2 児の母で、専業主婦をしている。彼女は自分の置かれている状況について「いったん子どもができて仕事を辞めちゃうと、信じられないくらい立場が弱くなるわ」(193) と語っている。第一波、第二波フェミニズムと女性が権利を求め続けた結果、制度もある程度整い、不平等は改善されたとされる社会においても「血を流すのは女だけ」(196) と言われている通り、単に出産だけではなく、女性にはいまだに困難が待ち受けており、精神的に血を流しているのである。特に出産をした女性には、育児と仕事をどのように両立していくのかという新たな問題が追加される。このように同じ女性の中でも、女性が自立しやすい社会になったことにより、ライフステージによってそれぞれ異なる問題を抱えていることがわかる。

最後に「独善的もいいところの夫婦者」(57) と呼ばれている人物たちについて分析する。彼らは変わっていく社会に対応できておらず、もともと社会に根付いていた考え、すなわち女性は早く結婚して家庭に入るべきという考えを持ち続けている。そして、そのような考えをブリジットに会うたびに「あなたがた、キャリアウーマンときたら！わけがわからないわ！永久に先のぼしするわけにはいかないのよ、わかるでしょ？時間切れは迫ってるのよ、チクタクチクタク」(15) や、「その歳で、よくも女が独りでいられるものだ」(16) などと押し付けている。また、彼らは物語の序盤、そして終盤で登場している。ここから、物語を通し、変化をする人物がいる一方で彼らは全く変わっていないことがわかる。このことより、女性は結婚して家庭に入るべきという考え方は社会からなかなか消えないことを示していると考えられる。

以上のように、ブリジットとマークの周りには、出産後の女性の苦悩や第三波フェミニズム、性的マイノリティへの差別など 1990 年前後の社会背景だけではなく、その少し前の第二波フェミニズムも反映されていることが明らかになった。また、ジェンダー平等の達成を遅らせるような古い考えを持つ人物もまだ多くいることが明らかとなった。このように様々な考え方を持つ人が混在している複雑さが 1990 年前後の社会と重なっていると言える。

第 3 節 ブリジットとマークの考え方

前節では、ブリジットの母親や友人について分析し、第二波、第三波フェミニズムの影響を受けている人や古い考え方を持つ人が混在する複雑な社会が作品には反映されていることが明らかとなった。本節では、そのような環境で生きる主人公ブリジット・ジョーンズとその相手役となるマーク・ダーシーについて分析を行う。そして彼らを通し、ジェンダー平等はどう描かれているのかを考察する。

まずはブリジットについてだが、彼女はロンドンで一人暮らしをする 30 代の独身女性で

ある。出版会社に勤めているが、仕事はあまりうまくいっていない。彼女は一年の始まりにダイエットや禁煙、節酒などの目標を立てて、それを達成させるために毎日日記をつけている。しかし最大の楽しみは友達と飲んで騒ぐことであり、前章で分析したシャロンやトムとはとても頻繁に飲みに出かけている。

一見どこにでもいるような普通の女性に思われるが、ブリジットはジェンダー平等についてどのような考えを持っているのだろうか。フェミニストである友人のシャロンが「あたしが結婚しないのは、独りで立派に生きていけるからよ」と女性の自立について語ると、ブリジットも「シングルトン、万歳！」(60)と誰にも頼らずに一人で生きていくことに賛成している。また、フェミニストの理論を聞くと毎回「ものすごく力を得たような気がするのとはしかだ」(113)とどこか勇気をもらっているように思われる。このような発言からは、ブリジットはシャロンの考え方に共感しており、彼女もフェミニストなのではないかと考えられる。しかし結局は、「なんといっても、けたたましいフェミニズムほど男にとって魅力のないものはないから」(30)とフェミニズムに反対するような発言や、友人から紹介されたフェミニズムに関する本を結局は読んでいない様子が描かれている。そのため、彼女は友人に感化され、話を聞いた後は一時的にフェミニズム的な考えを称賛しているものの、結局はフェミニストではないことが明らかである。

それではブリジットは、第1節で論じたフェミニズムは終わったものとして考えるポストフェミニズムに当てはまるのだろうか。英文学者の河野は、ブリジットは仕事や恋愛、ダイエットなどの失敗の苦難があるにもかかわらず、それをフェミニズム的な問題意識でとらえずに、日記によって自己管理をして自己革新をしようとしていると指摘する(152)。確かに彼女は、ほとんど毎日日記をつけ、仕事や人間関係でどのようなことが起こったのか、何を食べたのか、お酒をどのくらい飲んだのか、そしてたばこをどれくらい吸ったのかなどを細かく書いている。

この一年のあいだに、わたし以外の全員が〈独善的な既婚者〉に突然変異し、右を見ても左を見ても真ん中を見ても、ぼこぼこぼこぼこ子どもを産んだり、結婚してない人はしこたま稼いだり、体制のど真ん中に入り込んだりしてるのに、わたしときたら機能不全の人間関係と職業的停滞のおかげで、キャリアの面では舵のない船、私生活の面では恋人なし、というていたらくなんだから(114)

また、日記で上記のように自分の状況を他人と比較して嘆きながら、それらがうまくいかないのは自分に問題があると考えている。そしてその問題を解決するために、友人から聞いた風水や気の流れなどの方法を試し、「いずれすべてが順調に回りはじめる」(283)や「欲しいものはすべて手に入れられる」(365)とその問題の根本的な原因を探ろうとしていない。これはポストフェミニズムにみられる、自分が抱えている問題を個人の問題として考えて、ジェンダー不平等によるものだと思っていないという特徴と一致している。

また、社会学者の Gill と Herdieckerhoff はブリジットとポストフェミニズムのつながりについて、個人の選択とその選択をする力が与えられている点を挙げている。そしてその力は多くの第二波フェミニストが問題視するようなことを選択するために使用されていると指摘する (21)。ブリジットで考えると、その例の一つはダイエットだろう。「スーパーモデルと多すぎるクイズ番組に劣等感をいいように刺激され、自然に任せといたんじゃ、自分の人格も肉体もあるべき水準に達しないと思いつんでくちだ」(89) とブリジットによって語られているように、メディアによって「女性はこうあるべき」という像が提示されてしまっている。そしてその像に少しでも近づくために、自己監視をしてダイエットを続けることを自ら選択してしまっているのである。

以上のようにブリジットはポストフェミニズムとのつながりが強いと考えられるが、カルチュラルスタディーズを専門とする McRobbie は、それは新たな孤独や将来への不安のもとになっていると指摘する (261)。実際に物語の中で、「彼女たちは若々しく、野心的で、金銭的にも恵まれているが、その人生には痛みを伴う孤独が隠されている」(354) と独身女性について描いている雑誌が登場する。ブリジットや友人はこれを読んで怒っていたが、それは凶星だからなのではないだろうか。物語の中で、「三〇代になると、それまでの奔放さをなくし、初めて感じた生存不安」(29) の痛みと格闘するようになると将来や孤独への不安が語られている場面がある。ジェンダー平等が達成されていれば、女性が一人で生きていくことに何も問題はないだろう。しかしこのように不安を感じていることは、まだ平等は達成されていないということであり、それを個人の問題として考えてしまっているために、余計に不安を抱えてしまっているのではないだろうか。このように考えると、ポストフェミニズムの時代を生きる女性には、将来や孤独に対する不安が与えられていることは確かだろう。

次に、人道派弁護士のマーク・ダーシーについてである。「ロンドンでもっともすてきな独身男性五十人」(281) に名前が載るほど有名な人物であり、社会的評価が高いことがうかがえる。彼は日本人の女性と結婚していたが、離婚して現在は独身である。それではマークはジェンダー平等についてどのような考えを持っているのだろうか。彼は物語の中で、有名なフェミニズムの論文を読んでいることを明らかにしている。人道派の弁護士という職業によるものという可能性は否定できないが、その論文を実際に自分では読んでいないブリジットよりは、少なくともジェンダー平等について興味を示しているのではないかと考えられる。また、彼はブリジットのことを「急進的なフェミニスト」(343) だと勘違いしていたことも注目すべき点である。ブリジットは男性に嫌われるという理由から、フェミニズムに対し良いイメージを抱いていなかったが、彼はそのようなことは気にしておらず、むしろそこも含め彼女に興味を抱いていたのである。マークはジェンダー平等においてフェミニズムを強く支持する描写は見られないが、少なくとも関心を持っていると言えるのではないだろうか。

以上のようにブリジットとマークについて分析を行ったが、『ブリジット・ジョーンズ

の日記』では彼らを通し、ジェンダー平等がどのように描かれているのだろうか。

McRobbie は本作品はポストフェミニズムをよく表しているものであると指摘しているが (255)、分析を踏まえて考察すると、単にポストフェミニズムを表しているだけの作品ではないといえる。その理由の一つはブリジットと母親であるパム・ジョーンズの関係から読み取ることができる。上記で論じた通り、ブリジットは将来についてなど様々な不安や、仕事や恋愛に対する苦悩を抱えているが、そのようなことを母親であるパム・ジョーンズは抱えていない。前節で論じた通り、パム・ジョーンズは第二波フェミニズムの影響を受け、家庭に縛られないような生き方に変えた。そのことにより、彼女は仕事も手に入れ、恋愛においても夫以外の男性と楽しむようになり、将来への不安も一切ないようであった。ブリジットからみるとそのような母親は「母は力を発見したのだ」(94)と語っているように、苦悩を抱えることもなく、いきいきと自信をもって人生を歩んでいるのである。このようにブリジットの問題を母親は抱えていないことから、物語を通してジェンダー平等を追い求める重要性を提示しているのではないだろうか。

また、本作品はマークを通して新たな男性像を提示しているとも考えられる。女性自身ですらフェミニズムを嫌悪している時代にも関わらず、マークにはそのような様子は見られなかった。男性が女性よりも優位に立っているとされる社会において、ジェンダー平等を望み社会を変えようと行動するのは、常に女性が中心であった。そのため、男性がフェミニズムに興味を持つということだけでも、それはジェンダー平等達成に近づく大きな一歩になるだろう。このように、本作品はマークをフェミニズムに興味を持つ人物にすることで、ジェンダー平等に関心を持つ新たな男性の像を提示しているのではないだろうか。

以上のように、本節ではブリジットとマークを通しジェンダー平等がどのように描かれているのかについて考察した。ブリジットはジェンダー平等に対し、ポストフェミニズムの立場をとっており、それによりジェンダー問題に気づいていないことが明らかとなった。そしてそのような彼女よりもマークのほうが、ジェンダー平等について関心を持っていることが明らかとなった。そのため『ブリジット・ジョーンズの日記』におけるジェンダー平等の描かれ方については、単にポストフェミニズムの状況を描いているのではなく、マークのような新しい男性像や、ブリジットと母親の関係を通しジェンダー平等を求め続ける重要性が描かれていると考えられる。

本章では、『ブリジット・ジョーンズの日記』の作品分析を行った。1990年のイギリスでは、ジェンダー平等を求めて行動し続ける人がいる一方で、ポストフェミニズムと呼ばれるフェミニズムは終わったものとしてとらえる状況が生まれてしまっていることが明らかとなった。そして本作品には登場人物を通し、そのポストフェミニズムだけではなく、第二波フェミニズムや同性愛者の状況、また戦前と同じような考えを持つ人など、様々な考えを持つ人がいることが反映されていた。そしてそのような登場人物を通し、『ブリジット・ジョーンズの日記』では、ジェンダー平等を求め続ける重要性や新しい男性像が提示されているといえる。

第3章 ジェンダー「平等」を達成するためには

第1章と第2章では、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の作品分析を行った。本章ではそれを踏まえた上で両作品の比較分析をして、その結果よりこれからのイギリスや日本はジェンダー平等を達成するために何をしていくべきなのかを考察する。はじめに両作品を比較し、その相違点や共通点を明らかにする。次に、その相違点と共通点を参考にして、これからのイギリスはジェンダー平等を達成するためには何をすべきなのかを考察する。そして最後に平等が進むとされるイギリスを参考に、日本では何をすべきなのかを考察する。

第1節 『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析

本節では、ジェンダー平等の課題を探るために『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析を行い、その相違点と共通点を明らかにする。『高慢と偏見』が描かれてから『ブリジット・ジョーンズの日記』が描かれるまでには約200年という長い時間がある。どちらの作品にもジェンダー平等が描かれていたが、両作品に共通点はあるのだろうか。また、相違点ではどのようなことが挙げられるのだろうか。

まずは相違点である。両作品をジェンダー平等という観点において比較すると、一番の変化した点は女性が働いていることである。『高慢と偏見』の時代では、中産階級の女性が就ける職として家庭教師があったが、女性が働くこと自体が社会において良いこととされなかった。そのため、作品に登場する女性は働いておらず、家庭を切り盛りしていた。しかし『ブリジット・ジョーンズの日記』では、主人公ブリジットをはじめ、女性が働くことが一般的となっている。また、職業についても特に制限はないように思われる。しかし、母となった女性が働きたくても働けない様子が描かれていたため、すべての女性が自由に働いているということではない。そのため、女性が働いているということは一つの相違点であるが、それはすべての女性に当てはまるとは限らない。

女性の仕事における変化は、さらに様々な変化をもたらしている。その一つは結婚である。女性が自らお金を稼ぎ、自立できるようになったことで、生きていくために必要であった結婚が必ずしもしなくてもいい自由なものになった。そのため、女性にとって必ずしも結婚が人生におけるゴールではなくなり、『高慢と偏見』では物語の終わりで主人公が結婚したが、『ブリジット・ジョーンズの日記』では2人がカップルになってはいたものの結婚はしていない。この結婚における変化は女性だけではなく男性にも言えることだろう。

また、結婚だけではなく、離婚も自由なものとなっている。『ブリジット・ジョーンズの日記』では『高慢と偏見』ではなかった離婚経験のある人物が描かれている。それはマークであり、日本人の女性と結婚したが離婚をしたと物語中で説明されている。1800年頃、離婚は容易にできるものではなかったが、1990年頃になるとそれが変化しており、比較的自由的なものになっている。ここにも女性が自立し一人で生きていけるようになったことが大いに関係していると言えるだろう。このように女性が働くことに伴い、さらに多くの相違点

が生まれていることが明らかである。

その他の相違点としてはホモセクシュアルが登場していることが挙げられる。『ブリジット・ジョーンズの日記』には、ブリジットの親友として同性愛者のトムが登場する。物語の中では、彼に向けられた差別的な発言は一部あるものの、ブリジットをはじめ友人らに同性愛者に対する差別的な感情はみられない。一方で、『高慢と偏見』では異性愛が当然のこととして描かれている。そのため、差別的に描かれることもなく、同性愛者を含む性的マイノリティと呼ばれる人物は一切出てこないのである。前章で論じた通り、当時は同性愛は法により禁止されていたため、物語で描くことはできなかったと考えることもできる。1990年にはこの法は既に改正されており、まだ差別は残されているものの『高慢と偏見』の時代と比べて性の多様性が認められつつあるということが、作品にも表れていると言えるだろう。

次に共通点である。英文学者の Gymnich と Ruhl は両作品では“Mr. Right”を見つけることがテーマの一つとなっているが、それは社会からの圧力によるものだと指摘している(26)。ここで使用されている“Mr. Right”とは理想の男性という意味である。どちらの作品にも、相手を見つけなければならないというような社会からの圧力が登場人物の発言から読み取ることができる。『高慢と偏見』では母親により「あなたを養ってくれる人なんていませんよ」(上巻 198)と、そして『ブリジット・ジョーンズの日記』では独善的既婚者と呼ばれるような周囲の人物により「そんなことで、赤ちゃんはどうするの」(437)などと、結婚や出産は必ずしなければならないことであるかのような発言がされている。どちらの作品でもこのような発言が描かれているため、女性に対する社会の圧力はなかなかなくなるということが明らかである。

また、社会からの圧力により将来への不安を持っていることも共通点だろう。『高慢と偏見』では、女性は結婚ができずにオールドミスになる不安を抱えている様子が、特にシャーロットを通して描かれていた。また、一方で『ブリジット・ジョーンズの日記』では、女性は働きお金を稼ぐことができるのにも関わらず、孤独への不安がブリジットを通し多く描かれていた。ジェンダー平等が進んでいるのにも関わらず、同じように将来への不安を感じていることは注目すべき点だろう。女性の権利がほとんどなかった時代、そしてポストフェミニズムと呼ばれている時代と、両作品で社会背景は大きく異なるため、その不安の大きさや原因ももちろん異なるだろう。しかしどちらの時代に生きる女性も同じような不安を抱えていることは、ジェンダー平等において不平等がなくなっていないからだと考えることができる。

父親が働き、女性が家事をするという家庭のかたちが描かれていることも共通点の一つである。『高慢と偏見』の時代では女性の社会的な立場により、そのような家庭のかたちが一般的だったため、実際に物語に出てくる家庭はすべてそのようなかたちをとっていた。一方で『ブリジット・ジョーンズの日記』では、相違点で上げたように、女性が働けるため家庭のかたちにも変化があったのではないかと考えられる。しかし実際に物語を読むと、ブリジットの一つ前の世代である母親と父親だけではなく、同年代の友人も出産後は仕事を辞

め、家事や育児に専念している様子が描かれている。そのため、女性が家庭を守り、男性が働きに出るといった家庭のかたちは、女性も男性のように働くことができるようになってもお変化していないことが分かる。

これまではジェンダー平等の観点から両作品の相違点や共通点を明らかにしたが、その他の「平等」の観点においても共通点がある。それは人種であり、どちらの作品にもほとんど白人しか登場していない。時代が進むにつれて、ジェンダー平等同様、人種問題においても徐々に多様性が認められるようになっていくと考えられるが、それが変化していかないのは、イギリス社会においては白人が大多数を占めており、優位な立場にいるからなのではないかと考えられる。ジェンダー平等をより効果的に促進していくには、このような人種問題を含めた様々な「平等」も重要になるだろう。

以上のように、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』には様々な相違点や共通点があることが明らかとなった。相違点としては、仕事や結婚、同性愛者の登場が挙げられるが、それらはイギリスがジェンダー平等の達成に向けて歩んできた道と言えるだろう。また、共通点としては、社会からの圧力や家庭のかたち、人種があることが明らかとなった。これらの共通点は、イギリス社会に長い間残り続けているものであり、それは解決していかなければならない課題なのではないだろうか。

第2節 イギリスにおけるジェンダー平等のこれから

前節では、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析を行い、その共通点と相違点より、イギリス社会におけるジェンダー平等の進歩した点や課題を明らかにした。本節では、それをもとに現在のイギリス社会の状況を分析する。そして、これからのイギリスではジェンダー平等に向けて何をしていくべきなのかを考察する。

前節で、男性が働きに出て、女性が家事をするという家庭のかたちが『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の共通点であり、それがイギリス社会における課題の一つではないかと論じた。果たしてこの家庭のかたちは現代でも変わっていないのだろうか。筆者が2018年の8月にイギリスを訪れた際に、インタビュー調査として家庭での男性、女性の役割について質問をした。調査をした地域としては、ケンブリッジ、ロンドン、エディンバラ、そしてオックスフォードの4地域であり、男性21名、女性24名の計45名から話を聞いた。調査結果としては、男性は「平等である」という回答と、「男性が働きに出て女性が家事をするという伝統的な家庭のかたちである」という回答が半数ずつであった。一方で女性は約9割が「伝統的な家庭のかたちである」と回答をした。この結果より、現在でも『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』と同様、男性が働き、女性が家事をするという家庭のかたちは多くの家庭では変化しておらず、ジェンダー問題の課題の一つだということが明らかである。また、女性は家事をしなければならないということから『ブリジット・ジョーンズの日記』で描かれていた、「いったん子どもができて仕事を辞めちゃうと、信じられないくらい立場が弱くなるわ」(193)という出産した女性の苦難も納得すること

ができる。

家庭のかたちについての調査結果で、男性と女性の間認識のギャップがあることは注目すべき点である。ほとんどの女性は「伝統的な家庭のかたちである」と回答した一方で、男性では「平等である」という回答が半数もいた。この男女による認識の違いは、ジェンダー平等が達成されていない要因の一つなのではないだろうか。なぜなら、不平等であることに気づかなければ、その問題にどのように取り組むべきなのか、行動に移すことが難しいと考えられるからである。この男女の認識の違いの理由としては、やはり不平等を経験しているか否かの違いが大きいだろう。実際に「男女の格差を感じたことがあるか」というインタビュー調査の結果として、男性では9割が「いいえ」、女性では9割が「はい」と回答した。また、続けて「どのようなことに格差を感じるか」と質問したところ、「職場」という答えが多い一方で、「すべてに感じる」と答えた女性もいた。結果は予想通りであるが、このように普段男性は不平等を感じていないからこそ、その問題の認識をしにくいのではないだろうか。

以上の分析より、ジェンダー平等において、男性の不平等に対する認識、そして取り組みが必要だと考えられる。教育社会学者の多賀は、近年 EU 諸国をはじめ男性に向けた取り組みが増えており、「ケアする男性性」と「参画する男性」という言葉がキーワードとなると論じている(58)。これらの言葉は従来の男性のあり方に替わる新しい男性像を推奨すること、そしてジェンダー平等へ向けた変化の担い手になるという当事者意識を持たせるためのキーワードになっているという(66)。大部分が女性によって行われている育児や福祉などのケア労働を男性も担うようにさせる「ケアする男性性」や、ジェンダー問題の当事者であると気づかせるような「参画する男性」の取り組みは、男性に問題認識をさせ変化を促すにはとても効果的だろう。しかし、多くの男性がケア労働を担うようになるには、まずは当事者意識を持たせることが必要である。また、すべての取り組みを一気に押し付けてしまつては反発が起こる可能性もあるため、一つずつステップを踏んでいくことが重要だろう。

以上のような男性に対する取り組みがより広まっていくことで、今まで主に女性が中心であったジェンダー問題の解決を効果的に進めていくことができると考えられる。第2章第3節における『ブリジット・ジョーンズの日記』のマークについての考察で、彼を通してジェンダー平等に関心を持つ新たな男性像を描いているのではないかと論じた。そして、まさに彼のような男性が「ケアする男性性」や「参画する男性」になっていくのではないだろうか。

また、多賀は男性に対する取り組みをすることは、男性は制度的特権を手放す一方で、男性らしくあることのコストから解放されることになることと指摘している(60)。まだ不平等が残る社会では、『高慢と偏見』の時代からあるような男性は働いてお金を稼がなければならない、家族を守らなければならないというような重圧がある。ジェンダー問題においては、女性の問題の方だけに目を向けてしまいがちだが、男性も問題を抱えていることを忘れてはならない。そのため、男性の取り組みに力を入れていくことは男性にとっても、とても意

味のあることになっていくだろう。

『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の他の共通点としては、社会からの圧力が挙げられたが、その圧力はどこから生まれるのだろうか。そこには長い期間続くサイクルがあると考えられる。社会の圧力を受けてジェンダーに対する考えをつくられて大人になった人々が、今度は自分自身が圧力の一部となって子どもに影響を与えてしまっている。そしてその子どもが成長して大人になっていき、自分が圧力の一部になっていくのである。

ダーリン、あなた、マーク・ダーシーのこと、憶えてる？マルコムとエレインの息子さんの。彼、五本の指に数えられる超一流の弁護士さんなのよ。離婚したんですって。エレインの話じゃ、仕事仕事の毎日で、すごく淋しい生活なんですってよ。彼もウナの新年ターキーカレー・パーティに来るかもしれないのよ、じつをいうと (17)

このように『ブリジット・ジョーンズの日記』でも、実際に親から子どもに対して遠回しな言い方ではあるが、発言を通し早く相手を決めて結婚するべきというような圧力が与えられている。また、『高慢と偏見』においても似たような発言がみてとれる。そのため、少なくとも『高慢と偏見』が描かれた 1800 年からこのサイクルが続いているとすれば、これは 200 年以上続いているものである。このサイクルを止め社会の圧力を小さくしていくには、何をすべきなのだろうか。

教育は一つの方法だと考えられる。イギリスでは 2010 年に「平等法 (Equality Act)」が制定された。教育省である Department for Education が発行した“The Equality Act 2010 and schools” (2014) を見てみると、性別や人種、障がい、宗教などによる差別を行ってはならないことが示されている (8)。そして、男子生徒には針仕事と木工細工のどちらを学ぶか選択肢があるのにもかかわらず、女子生徒には針仕事しか選択肢がないことは違法であるというような例を挙げながら、一方の性が有利な状況に置かれることは差別であり、違法であることなどを提示している (20)。これは学校に対するアドバイスのごく一部であるが、平等法に基づいて学校に対し、具体的な例を示しながら助言をしていることは、学校もどのように対応していくべきなのかがわかりやすいため、平等への取り組みが実行しやすい環境がつけられていると言えるだろう。そのため、ジェンダー教育による子どもたちの変化も大いに期待することができる。

以上のように教育は、若い世代に固定的な性に対する意識を植え付けることを防ぐことのできる可能性が高いため、社会の圧力を生み出すサイクルを断つ効果的な方法であるが、それは学生以外の人々に変化を与えることはできない。そのため、大人に向けた取り組みも必要不可欠である。それには上記で論じた男性への取り組みや、職場や地域、また子どもらと一緒に平等に関する教育を行うことがいいのではないだろうか。子どもと比較すると、大人の方がジェンダーにおける考えが固定化されてしまっているため、変化には長い時間が

必要になるだろう。そのため、どのような取り組みをするにも一度だけではなく、何度も取り組みを重ねていくことが必要である。

同性愛者を含む性的マイノリティについては、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の相違点として挙げられ、平等において進歩している点だと捉えられた。しかし、これについても男女平等と同様、まだ十分とは言えないのではないだろうか。性的マイノリティについても、方法としては教育が特に若い世代に効果的だろう。性教育学者の小宮は、イギリスでは教育技能省が積極的に同性愛嫌悪を防ぐための報告書を発行したり、性的マイノリティを嫌悪する学校の風土を変える試みに多額の資金を拠出したりなど、明確な動きがとられていると指摘している(38)。このような教育の支援が続いていくことによって、性にとらわれずに生きていくことのできる、ジェンダー平等が達成された社会に近づくことができるのではないだろうか。

以上のように、ジェンダー平等の達成に向けてまだ課題は残されているが、ジェンダーの問題に対しては男性も高い意識を持っている。筆者のインタビュー調査で「イギリスの男女平等は進んでいると思うか」という質問に対して、男女とも7割以上の人々が「いいえ」と回答した。上記で男性は不平等を感じる機会が少ないため、問題の認識はしづらいと論じたが、そのような男性でも問題意識という点では高い意識を持っている。回答の内容としても、男女ともに「以前よりは良くなっている」という声が多く聞かれ、これは問題意識があるからこそその変化を捉えられていると考えられる。この問題意識の高さは、ジェンダー平等を進めていくにおいて欠かせないものであり、これからの様々な取り組みの原動力となる重要な点だと言えるだろう。また、この意識の高さがあるからこそ、世界的に見てもイギリスが現在においてジェンダー平等が進む国とされているのではないだろうか。そして『高慢と偏見』や『ブリジット・ジョーンズの日記』のような文学作品が時代を超えて人気を集めていることも、問題意識を高めることに貢献しており、そこにこれらの文学作品の価値があると言える。

これまではジェンダー平等を達成させるために、どのようなジェンダー問題への取り組みをするべきかを論じてきたが、他の「平等」への取り組みも結果的にジェンダー平等につながるのではないだろうか。2010年に制定された平等法でも、性別や障がいなどあらゆる平等について含まれていたが、あらゆる面で平等を目指していくことで社会全体として、差別をしない環境が生まれていくことが期待できる。そのため人種の問題の解決もまさにジェンダー平等につながっていくと考えられる。

前節で論じた通り、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の両作品では、ほとんど白人しか登場していなかった。実際にイギリス政府のデジタルサービスであるGOV. UKのpopulation of England and Walesによると、一番最近行われた2011年の国勢調査でイングランドとウェールズの80%以上が白人であり、またFeeling of belonging to Britainで白人は「イギリスに属していると強く感じる」と答えている。この白人が感じているイギリスとの強いつながりは、他の人種に対して差別意識を生んでいるのではない

だろうか。GOV. UK の 2018 年における NHS staff experiencing discrimination at work の調査では、白人のスタッフよりも他の人種のスタッフの方が仕事において差別を経験したと結果が出ている。これにより人種問題においても不平等がまだ残っており、平等においてイギリスが取り組むべきなのはジェンダー問題だけではないことが明らかである。そのため、このような人種問題も含め、多角的に「平等」に取り組んでいくことが、ジェンダー平等だけではなくすべての「平等」を達成させるために重要になっていくだろう。

本節では、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析の結果をもとに、これからイギリスではどのようにジェンダー平等に取り組んでいくべきかを考察した。現代のイギリスにおいても、『高慢と偏見』や『ブリジット・ジョーンズの日記』と同様に、家庭のかたちや社会からの圧力、性的マイノリティなど、ジェンダー問題が残されていることが明らかとなった。そしてそれらを解決していくためには、男性に向けた取り組みや教育が重要になると考えられる。また、人種問題を含めあらゆる面の不平等をなくしていくことも、ジェンダー平等をはじめ、全てにおける「平等」を促進させるために重要である。

第 3 節 日本におけるジェンダー平等のこれから

前節では、これからのイギリス社会ではジェンダー平等を達成させるために、男性への取り組みや教育、また人種など他の平等への取り組みが必要であると論じた。本節では、日本より平等が進むとされるイギリスを参考にしながら、ジェンダー平等を達成するためのこれからの日本の取り組みについて考察を行う。そのために、まず現在における日本のジェンダー平等の状況について明らかにする。そして前節を踏まえた上で、これからの日本におけるジェンダー平等の課題や取り組みについて論じる。

まずは現在の日本社会で、ジェンダー平等がどのような状況にあるのかを明らかにする。序章で提示したように、世界経済フォーラムの **The Global Gender Gap Report 2018** において、イギリスが 149 か国中 15 位と上位なのに対し、日本は 110 位と大きく遅れている。これまでの分析により、上位に位置するイギリスでも問題は多く残されていることが明らかとなったが、日本ではどのようなジェンダー問題を抱えているのだろうか。ランキングでは、経済、教育、健康、政治の四分野が分析されており、日本では特に経済、政治においてポイントが低いことが読み取れる。これは政治家や管理職の男女差や収入格差などが理由として挙げられる。また、内閣府の男女共同参画局が掲げている男女共同参画基本計画では、女性に対する暴力や家庭での不平等などを問題視している。もちろんこれらは問題の一部だろうが、職場や家庭、政治など社会のあらゆる面で多くの問題があることがわかる。

前節で、イギリス人はジェンダー問題への意識が男女ともに高く、それが取り組みへの原動力となっているのではないかと論じたが、日本ではどうなのだろうか。2019 年度に行われた男女共同参画社会に関する世論調査で、「社会全体における男女の地位の平等感」に対して、「男性のほうが非常に優遇されている」とする回答が約 11%、「どちらかといえば男性のほうが優遇されている」とする回答が約 63%、「平等」とする回答は約 21%、「女性の

ほうが優遇されている」とする回答が約3%となった。この結果より、日本人はジェンダー問題に対する意識が高いとは言えないのではないだろうか。なぜなら日本でジェンダー不平等があることは明らかなのにも関わらず、「非常に優遇されている」と答えたのはわずか10%であり、不平等を問題として捉えることができていない。そのため、この意識の低さは日本がジェンダー平等において遅れをとっている大きな要因の一つであると考えることができる。

また、2019年1月に内閣府によって発行された『共同参画』では、国としてもジェンダー問題に対する意識の低さが表れている。この『共同参画』ではThe Global Gender Gap Report 2018の結果が紹介されている。そして2017年に比べ、経済分野のスコアが大きく伸びており、この要因は労働参加率の男女比や賃金の男女格差などが改善したことであると示している(7)。しかし数値は1を完全平等としたときに、2017年の0.580から0.595となっており、これは149か国中117位という順位である。確かにスコアを見れば、上昇していることは間違いない。しかし、それは大きくスコアが伸びた、格差が改善されたと満足できるような結果ではないだろう。このように日本では、全体としてジェンダー問題への意識が足りていないのではないかと考えることができる。

以上のように、日本全体においてはジェンダー問題に対する意識は低いと考えられる。そしてそれを改善するには、前節でも論じた教育現場の改善が特に若い世代に対し有効だろう。イギリスでは、学校に向けて明確なアドバイスを提示したり、学校の風土を変えるために資金を拠出したりなど、様々な取り組みが行われている。日本の教育現場においても、ジェンダー平等の取り組みを促すことができれば、生徒らに問題意識を高めさせること、そしてジェンダーによるステレオタイプを抱かせないことが可能になると考えられる。

しかし、ジェンダー研究者の牟田は、学校や行政により、何かを正しいものと上から押し付けてしまうと、それは権威を帯びた抗すべき対象となると指摘している(304)。教育によりジェンダー平等がそのような状況になってしまえば、平等の達成はますます難しくなってしまうだろう。そのためこれを防ぐには、牟田が指摘するようなジェンダー平等が正しいと上から押し付ける教育ではなく、なぜ平等が求められているのかその理由を考えさせるような生徒主体の教育が必要なのではないだろうか。したがって、若い世代への取り組みとしてはイギリスを参考にしながら、学校へ明確な支援をするとともに、抗すべき対象にしないような教育を心がけていくことが重要だと考えられる。

大人に対しては、問題意識を高めさせるにはどのようなことをすべきなのだろうか。前節で論じたような男性への取り組みや大人へ向けた教育も、方法の一つであり積極的に行うべきだろう。そして、その他の方法としてメディアの利用が有効だと考えられる。近年、性被害を告発する「#MeToo」運動をはじめ、世界でソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)を使用した発信が行われるようになった。日本においても「#MeToo」運動に影響を受け、職場でのハイヒール着用の強要に反対する「#KuToo」運動がSNSを通して行われた。BBCによるとこの運動により約1万9000人の署名が集まり、実際に日本だけ

ではなく、世界中の多くの女性がそれに賛同したという。このハイヒールに関する運動は2015年にイギリスでも社会問題となっており、結果として政府にこれを性差別だと認めさせることに成功している。

このようなメディアを使用した発信は、人々に問題意識を持たせることができる方法になり得るのではないだろうか。特にSNSは誰でも気軽に情報や意見を世界中に発信できる便利なツールである。そのため「#MeToo」や「#KuToo」のような運動が起こることで、短期間で多くの人々の注目、関心を集めることが可能である。そしてSNSでの発信がきっかけで、ジェンダー問題を広く知らせることができ、問題意識を高めることが期待できる。ただブームのようなかたちで問題への関心がすぐになくなってしまいう可能性も否定できない。しかし、たとえ短期間の注目であったとしても、その期間は少なくともジェンダー問題に関心を寄せていることは間違いなく、またそのような発信が積み重なっていくことで、社会において何が不平等なのか考えるきっかけにもなるだろう。

性教育学者の小宮は、同性愛において確固とした科学的根拠や思想に基づいているということではなく、時代の空気によって評価がなされていると指摘している(32)。これは同性愛だけに限らず、ジェンダー平等全体においても言えるのではないだろうか。例えば、日本における婦人参政権の獲得は1945年に実現したが、これは連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)による指示の影響が大きかっただろう。また、牟田は1999年の男女共同参画社会基本法が成立した要因は、女性らの運動が反対勢力との戦いによって勝ち得たということではなく、多くの政治家にとって関心の対象ではなかったからだと指摘している(57)。このように時代の空気や外圧による評価や取り組みは、同性愛だけではなくジェンダー平等全体においてみられると言える。しかし小宮は、一旦人権を守る気風が高まれば、動きが加速される可能性も十分あると指摘する(32)。そのため、例えば上記で論じたSNSでの発信などがきっかけにジェンダー問題を解決していくような気風が高まれば、平等達成に大きく近づいていくことが期待される。

これまでは、人々の意識的な面について論じてきたが、日本においては制度そのものも変化させていくべきなのではないだろうか。前節で、イギリスでは2010年に平等法が制定され、それにはジェンダー平等だけではなく、人種や障がい、宗教における平等が含まれていると示した。日本では、このイギリスの平等法に対応するものとして、男女共同参画社会基本法がある。しかしこの制度そのものにも問題が隠されている。牟田は、男女共同参画社会の実現は、日本社会の発展の手段として位置づけられているため、女性を劣位におくこれまでの権力構造を問い直す姿勢はないと指摘している(301)。牟田は男女共同参画社会基本法の前文にある「少子高齢化の進展、国内経済活動の成熟化等我が国の社会経済情勢の急速な変化に対応していく上で(中略)男女共同参画社会の実現は、緊要な課題」という文章よりこのような指摘をしているが、確かにこの文章からは男女不平等自体が深刻な社会問題であるという態度はあまりみられない。そのため、ジェンダー不平等は大きな社会問題であることをしっかりと踏まえた上で、社会の権力構造を根本的に正していくような法に変化

させていくことが必要である。また、平等を効果的に促進させるためには、イギリスのようにあらゆる面からの平等を同時に考えていくような法の制定も検討すべきだろう。このように、意識的な面、そして制度的な面の両方から取組みを進めることで、これからの日本において、性に縛られずに誰もが堂々と自由に生きていくことができる社会をつくっていくことが可能だと考えられる。

本節では、これからの日本ではジェンダー平等に対するどのような取組みをしていくべきかを考察した。日本では、ジェンダー不平等が社会のあらゆる面にあるのにもかかわらず、問題に対する意識が低いことが明らかになった。そしてそれを改善して、平等を促進させるには、教育やメディアを利用して意識的な面と、男女共同参画社会基本法の改善の制度的な面のどちらにも取り組んでいくことが重要である。

本章では、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析をもとに、これからのイギリス、そして日本では何をすべきなのかを議論した。両作品の比較の結果、共通点としては家庭のかたちや、社会からの圧力、またほとんど白人しか登場しないことが挙げられ、それがイギリス社会での課題であると明らかにした。それを踏まえ、これからのイギリスにおけるジェンダー平等の取組みとして、男性への取組みや教育、また多面的に平等に取り組むことが重要であることを示した。そして、イギリスを参考にしながら、これからの日本におけるジェンダー平等について論じた結果ジェンダー問題に対する意識の低さが明らかとなり、これを改善、そして平等を促進させていくためには意識的な面と制度的な面の両側面から取組みが必要である。

終章

イギリスはジェンダー平等が比較的進んでいる国である。しかし、まだ完全に平等が達成されたとは言えない。そこで本研究では、イギリス及び日本におけるジェンダー平等の課題を明らかにし、その課題を解決していくには何をすべきなのかを探ることを目的とした。方法としては、イギリスを代表する作家ジェイン・オースティンの作品の一つである『高慢と偏見』と、それをもとにして描かれたヘレン・フィールディングの『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析を主題とし、両作品の共通点や相違点から、イギリス社会および日本における課題を明らかにし、その改善策を検討した。

第1章では、まず『高慢と偏見』の作品分析を行った。1800年前後のイギリス社会では、現代にも通じるようなフェミニズムの思想もあった一方で、女性は男性よりも劣っているという考え方がまだ広く浸透しており、それは教育や結婚などに影響を与えていたことが明らかとなった。この社会の様子は、主人公エリザベス以外の4組の夫婦を通して物語で描かれており、特にシャーロットとコリンズの夫婦からは女性が生活するうえでの困難と男性の社会的な役割をよく読み取ることができた。そして、エリザベスとダーシーからは恋愛結婚をしたことで精神的に対等な関係を築けているものの、結婚後は結局ダーシーに頼って生きていくことで経済的には対等でないことが分かった。そのため、結果としては『高慢と偏見』ではジェンダー平等と不平等が混在しているが、むしろジェンダー平等を当時の慣習と織り交ぜながら物語に入れることによって、当時そして現代において多くの人々に受け入れられる作品になっているといえる。

次の第2章では、『ブリジット・ジョーンズの日記』の作品分析を行った。作品が描かれた1990年前後のイギリス社会では、1800年前後と比べ、女性に参政権が与えられるなどジェンダー平等は大きく前進した一方で、フェミニズムは終わったというポストフェミニズムの考えが広まっていることが明らかとなった。作品では主人公であるブリジットの友人らを通し、頑強なフェミニストや社会から差別の目を向けられる同性愛者、女性は早く家庭に入るべきという古い考えを持つ人など、ジェンダー平等において様々な考え方が混在する様子が描かれていた。また、ブリジットはポストフェミニズムの影響を受けている人物として描かれており、これは第二波フェミニズムの影響を受け、生き方を変えた母親と対照的であった。また、相手役であるマークはジェンダー平等について関心を持っていることが明らかとなった。そのため『ブリジット・ジョーンズの日記』におけるジェンダー平等の描かれ方については、単にブリジットを通しポストフェミニズムの状況を描いているのではなく、マークのようなジェンダー平等に関心を持つ新しい男性像や、ブリジットと母親の関係を通しジェンダー平等を求め続ける重要性が描かれているといえる。

第3章では、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の作品分析を踏まえた上で両作品の比較分析をして、その結果よりこれからのイギリスや日本は何をしていくべきなのかを考察した。比較分析では、相違点として仕事や結婚、また同性愛者の登場があることが明らかとなり、この変化はジェンダー平等において進歩した点と考えることができ

る。一方で共通点として社会からの圧力や、家庭のかたち、またほとんど白人しか登場しないことが挙げられ、これらは長い期間イギリス社会において残り続けている課題であると推察した。そしてこれらの課題は現在においても残っていることが明らかとなり、解決していくためには、男性への取り組みや教育を強化すること、また、人種問題を含めあらゆる面の不平等をなくしていくことも、ジェンダー平等をはじめ、全てにおける「平等」を促進させるにあたって重要である。また、ジェンダー平等が遅れているとされる日本については、ジェンダー問題への意識の低さが明らかとなり、それを改善して平等を促進させるには、教育やメディアを利用して意識的な面と、男女共同参画社会基本法の改善の制度的な面のどちらにも取り組んでいくことが重要である。

以上のように『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析よりジェンダー平等の課題を明らかにし、改善策を提示したが、両作品は社会学的な価値と文学的な価値の両方を備えた作品である。特に『高慢と偏見』においては 200 年経った現在でも人気を集めており、それは日常生活の中の出来事をユーモアを交えながらも鋭い視点で描くというオースティンの筆の力によるものだろう。また『ブリジット・ジョーンズの日記』の日記においても、日記形式という違いはあるものの日常を鋭い視点で捉えながらもユーモアを交え描かれている。そのため両作品は単におもしろさを与えているだけではなく、人々に物事を考えさせるような役割も果たす価値のある作品であると言える。

イギリスでは、そのようなジェンダー平等を考えさせられる『高慢と偏見』や『ブリジット・ジョーンズの日記』などの文学作品はドラマ化や映画化をされるほど人気を集めているが、日本ではそのような作品はあまりみられない。その理由を明らかにすることは難しいが、多少なりとも政治によるイデオロギーがあるとも考えられる。第 3 章第 3 節で論じたように政府があまり積極的にジェンダー平等に取り組んでいないことは明らかである。また日本では未だに男性優位の社会があり、これは総理大臣や議員の数をみると政治自体にも当てはまっていることがわかる。そして、日本の象徴とされる天皇制についても現在では女性天皇は認められていない。そのため、国としても現在においては男性優位のほうが好ましいため、政府によるコントロールがあるのではないだろうか。これは一つの仮説に過ぎないが、このイギリスと日本の違いを追及していくことで、今後さらに日本におけるジェンダー平等の課題を明らかにすることが可能となるだろう。

本論文では、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析より、イギリス社会におけるジェンダー平等の課題を明らかにし、その改善策を検討した。また、それを参考としながら、日本におけるジェンダー平等について論じた。その結論としては、男性へ向けた取り組みや教育に力を入れること、そして「平等」に多角的に取り組むことで、効果的にジェンダー平等を達成させることができると導きだした。以上のように、時代が異なる文学作品の比較より社会におけるジェンダー平等の課題を明らかにし、改善策を示したこと、そしてそれをもとに日本の課題に言及したことに本論文の意義がある。

参考文献

- BBC. "Thousands back Japan high heels campaign" June 3, 2019. Retrieved November 20, 2019, from www.bbc.com/news/world-asia-48504490
- Brown, Lloyd W. "Jane Austen and the Feminist Tradition." *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 28, No. 3, University of California Press, 1973, pp. 321-338.
- Department for Education. "The equality Act 2010 and schools." 2014, Retrieved November 20, 2019. from assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/315587/Equality_Act_Advice_Final.pdf
- Gill, Rosalind, and Elena Herdieckerhoff. "Rewriting the romance: new femininities in chick lit?" *Feminist Media Studies*, Vol. 6, No. 4, Taylor & Francis, 2006, pp. 487-504.
- GOV.UK. "Feeling of belonging to Britain." September 25, 2019, Retrieved November 20, 2019, from www.ethnicity-facts-figures.service.gov.uk/culture-and-community/community/feeling-of-belonging-to-britain/latest
- . "Population of England and Wales." August 1, 2018, Retrieved November 20, 2019, from www.ethnicity-facts-figures.service.gov.uk/uk-population-by-ethnicity/national-and-regional-populations/population-of-england-and-wales/latest
- . "NHS staff experiencing discrimination at work." August 12, 2019, Retrieved November 20, 2019, from www.ethnicity-facts-figures.service.gov.uk/workforce-and-business/nhs-staff-experience/nhs-staff-experiencing-discrimination-at-work/latest
- Gymnich, Marion, and Kathrin Ruhl. "Revisiting the Classical Romance: *Pride and Prejudice*, *Bridget Jones's Diary* and *Bride and Prejudice*." *Gendered (re)visions: Constructions of Gender in Audiovisual Media*, V&R unipress GmbH, 2010, pp. 23-44.
- McRobbie, Angela. "Post-feminism and popular culture." *Feminist Media Studies*, Vol. 4, No. 3, Taylor & Francis, 2004, pp. 255-264.
- World Economic Forum. "The Global Gender Gap Report 2016." 2016, Retrieved November 20, 2019, from www3.weforum.org/docs/GGGR16/WEF_Global_Gender_Gap_Report_2016.pdf
- . "The Global Gender Gap Report 2017." 2017. Retrieved November 20, 2019, from www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2017.pdf
- . "The Global Gender Gap Report 2018." 2018. Retrieved November 20, 2019, from

www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2018.pdf

- 安達みち代『近代フェミニズムの誕生ーメアリ・ウルストンクラフトー』世界思想社, 2002.
- 鮎沢乗光・青木剛ほか『MINERVA 英米文学ライブラリー①イギリス近代小説の誕生ー十八世紀とジェイン・オースティンー』都留信夫編, ミネルヴァ書房, 1995.
- ウルストンクラフト, メアリ『女性の権利の擁護』白井堯子訳, 未来社, 1980.
- 大島一彦ほか『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』内田能嗣・塩谷清人編, 世界思想社, 2007.
- オースティン, ジェイン『高慢と偏見 (上)』中野康司訳, 筑摩書房, 2003.
- .『高慢と偏見 (下)』中野康司訳, 筑摩書房, 2003.
- 『広辞苑第七版』岩波書店, 2018.
- 国広陽子編『メディアとジェンダー』勁草書房, 2012.
- 河野真太郎「おれたちと私たちはいかにして貧しさを失ったのか? 「世代問題」と文化と社会の分離」『言語社会』一橋大学大学院言語社会研究科, 7号, 2013, pp. 151-164.
- 小宮明彦「同性愛嫌悪をめぐる日英 (教育) 文化比較ー明示的差別の国イギリスと黙示的差別の国日本ー」『教育学研究室紀要: 「教育とジェンダー」研究』女子栄養大学栄養学部教育学研究室, 12巻, 2015, pp. 30-41.
- 坂田薫子「ベネット夫妻の言い訳: ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』に見られる結婚の理想と現実」『日本女子大学紀要 文学部』58巻, 2009, pp. 49-63.
- 多賀太「国際社会における男性ジェンダー政策の展開ー「ケアする男性性」と「参画する男性性」ー」『関西大学人権問題研究室紀要』76巻, 2018, pp. 57-83.
- 田中東子『メディア文化とジェンダーの政治学ー第三波フェミニズムの視点から』世界思想社, 2012.
- 内閣府『共同参画』119号, 2019.
- 内閣府『「男女共同参画社会に関する世論調査」の概要』内閣府政府広報室, 2019.
survey.gov-online.go.jp/r01/r01-danjo/gairyaku.pdf (最終閲覧: 11月27日)
- 内閣府男女共同参画局「男女共同参画社会基本法」
www.gender.go.jp/about_danjo/law/kihon/9906kihonhou.html (最終閲覧: 11月27日)
- 内閣府男女共同参画局「第4次男女共同参画基本計画」2015.
www.gender.go.jp/about_danjo/basic_plans/4th/ (最終閲覧: 11月27日)
- ハル, スーザン・W『女は男に従うもの?: 近世イギリス女性の日常生活』佐藤清隆・滝口晴生・菅原秀二訳, 刀水書房, 2003.
- 廣野由美子『深読みジェイン・オースティン』NHK出版, 2017.
- フィールドینگ, ヘレン『ブリジット・ジョーンズの日記』亀井よし子訳, 角川文庫, 2015.
- ホールズワース, アンジェラ『人形の家を出た女たち: 20世紀イギリス女性の生活と文化』石山鈴子・加地永都子訳, 新宿書房, 1992.

- 松本啓『ジェイン・オースティンの世界』近代文藝社, 2011.
- 三浦玲一・早坂静編『ジェンダーと「自由」理論、リベラリズム、クィア』彩流社, 2013.
- 牟田和恵「フェミニズムの歴史からみる社会運動の可能性: 「男女共同参画」をめぐる状況を通しての一考察」『社会学評論』日本社会学会, 57 卷, 2 号, 2006, pp. 292-310.
- 谷田恵司・向井秀忠・清水明編著『ジェイン・オースティンの世界』鷹書房弓プレス, 2003.